

# 宗教心理学研究会ニューズレター

第14号 2011.3.25

## 宗教心理学研究会

*Society for the study of psychology of religion*

### 目次

第 8 回研究発表会報告	報告 辻本 耐	1
死別後の意味再構成と宗教的物語—ワークショップ「死生の意味するもの: 生と死をみつめる宗教心理学」をめぐる雑感	川島大輔	7
「終末期患者の有する宗教性と死の受容」—「臨床宗教心理学」の可能性と拡がり—	大村哲夫	9
「生」と「死」の連続性から見る人間存在の意味と宗教について	中里和弘	10
第 8 回ワークショップ企画に参加して	具志堅伸隆	11
第 8 回研究発表会を拝聴して	松田茶茶	13
事務局からのお知らせ		15

## 第 8 回研究発表会報告

報告 辻本 耐(大阪大学大学院)

2010年9月21日(火)9:30~11:30,日本心理学会第74回大会(@大阪大学)ワークショップにおいて,第8回研究発表会「宗教心理学的研究の展開(8)-死生の意味するもの:生と死を見つめる宗教心理学-」が行われた。今回の研究発表会の企画趣旨は,「生と死について,どのように考え,どのように向き合うのか」という生と死にまつわる問題を宗教心理学的立場から検討することであった。

当日は,開始時間が早かったにもかかわらず,大会2日目ということもあって日程にも恵まれ,最終的には40名を超える参加者があり,配付資料が不足するほどの盛況ぶりであった。今回で8回目ということで,回を重ねるごとに,宗教心理学という分野が認知されつつあることを肌で感じるとともに,近年,自死や無縁死といった

死にまつわる出来事が社会問題化していることから,こうしたテーマへの関心の高さが伺われた。

### [ 話題提供 ]

#### 1.『子どもは死んだらどうなっているのか?』:辻本耐(大阪大学大学院,報告者)

発表のトップバッターを仰せつかったのは,この報告書を書いている辻本である。僭越ながら,発表内容の概略を記したいと思う。

「死んだらどうなるのか」という問に対する1つの答えとして,「天国に行く」,「生まれ変わる」などの死後の生に関するものが考えられる。こういった死後の生についての信念を測定するものとして, Belief in afterlife scale (Osarchuk &

Tatz, 1973), 来世観尺度(金児, 1995)といった尺度が開発されてきた。また, 死に対する態度や死の不安を測定する尺度にも死後に関する項目が含まれている。そして, 死を生々の終わりではなく, 新たな生の通過点として捉えることが, 死の不安を軽減し, 心理的健康を維持するとして, これらの尺度を用いて, 死が現前化している高齢者などを対象に検討されてきた。

それでは, こういった死後の世界を我々はいつ頃から認識するのであろうか。とくに日常生活の中で, 死者の行方を表現するものとして「天国」という言葉が一般的となっている。本発表では, こういった表現の獲得を宗教性の萌芽と捉え, 幼児期にある子どもを対象に行った調査の結果を報告した。具体的には, 年少児から年長児までの子ども 117 名(分析対象 110 名)を対象に個別面接を行い, 「人間が死んだらどうなるのか」, 「動物が死んだらどうなるのか」という2つの死後に関する調査を行った。結果として, 2つの質問から得られた反応を分類すると, 「天国に行く」・「空に行く」・「星になる」といった「来世に関するもの」, 「お墓にはいる」・「骨になる」などの「死を現実的に捉えたもの」, 「病院に行く」・「買い物に行く」などの「生と死が未分化なもの」の3つのカテゴリーに分類することができた。そして, 年齢が上がるにつれ, 「来世に関するもの」, 「死を現実的に捉えたもの」の割合が増え, 死後についての間に適切に回答できるようになり, とくに, 5～6歳頃に「天国」などの死後の生に関する表現が多く認められるようになることが明らかとなった。また, 人間と動物の死後観については, 「生と死の未分化」の割合が人間と比べて動物の方が少なかったものの, 明確な差異は認められなかった。

以上のように, 幼い子どもであっても死後の世界を認識しつつあることが示唆された。ただし, 例えば「天国」と答えた子どもが, 死後の世界の存在を必ずしも信じているわけでは当然ない。多くの子どもたちは, 「天国へいく」, 「空へいく」, 「お墓にはいる」などの死後に関する表現をあらかじめ知っており, それを使って答えているだけなのである。しかし, こういった単なる表現の獲得から, 成長とともに生じる死別などの様々なライ

フイベントを通じて, 「もしかしたらあるかもしれない世界」と捉えるようになっていくのであろう。

## 2.『終末期患者の有する宗教性と死の受容』: 大村哲夫先生(東北大学大学院/医療法人爽快会)

発表者である大村先生は, 臨床心理士・チャプレンとして, 終末期患者に寄り添うという在宅ホスピスの現場で活動されている。自分の死を直視する, 近親者の死を受け入れていくという現場において, 宗教(的なもの)がいかに関わっているのかという発表内容であった。

-----

我々は, 健康を前提として, 社会に関与していく中で趣味や生きがいといった生きるための価値観を見出している。しかし, 病気などによって健康が損なわれると, この価値観が崩壊し, 様々な苦しみが生じることとなる。例えば, 終末期にある患者からは, 死ぬときに苦しむのだろうかという不安, 自分が消滅してしまうことに対する恐怖, 働けなくなってしまったことへの絶望, 介護などで家族に迷惑をかけてしまうことへの申し訳なさといった苦しみがよく聞かれる。そこで, 「よりよく生きる」ための「生きる意味」を説くと同時に, 「よく死ぬ」ために, 天国や極楽といった死後の世界, 死者の復活, 死者の救済といった「死ぬ意味」を伝えてきた宗教が必要となってくる。

一般的に, 日本人は無宗教といわれている。2008年に行われた読売新聞の調査では, 「宗教を信じている」と答えた人は全体の26%, 信心深いといわれる70歳以上の高齢者であっても41%, 「宗教を信じていない」と答えた人は約72%となっていることから明らかである。それでは, 「死ぬ意味」を伝えてくれる宗教を信じていない日本人は, 自分の死や他者の死をどのように受け入れていくのであろうか。

先述のように, 日本人は無宗教であり, 合理的であるように思われるが, 2008年度の読売新聞の調査では, 全体の64%が魂の存在を認めていると報告している。同じく, 読売新聞および東北在宅ホスピス研究会の調査では, 約7割の人が死者供養の儀礼である墓参りといった宗教行

動を行っている。これらの調査から、日本人は死を単なる終わりではなく、死後も何らかの形で存在し、生者と死者がつながっているという感覚、つまり、宗教というよりは宗教性あるいはスピリチュアリティという次元で死を捉えていると考えられる。

また、終末期にある患者は死の一週間ほど前になると意識レベルの低下によって、「死者のビジョン」という幻視を見ることが多い。一般的には、この現象を「お迎え」と呼んだり、「譫妄」と診断されたりするが、多くの臨死者は、生と死の世界が交錯する場に違和感を覚えることはない。この場合も、臨死者が死者のビジョンをスピリチュアリティの次元で受けとめ、その結果、死の恐怖が除かれ、生から死への移行が可能になると考えられる。そして、こうした安らかな死を看取った家族は、その経験から生と死の世界が疎通する世界観を学び、「死に方」を学習していくのであろう。

以上のように、たとえ無宗教の日本人であっても、死を宗教性もしくはスピリチュアリティという次元で捉えるという感覚によって、自分自身もしくは他者の死の受容が可能になるのではないかと考えられる。

### 3.『自死遺族の意味再構成と宗教的物語』:川島大輔先生(国立精神・神経医療研究センター)

年間自死者が3万人を超えるなか、残された家族に対するケアの必要性が求められている。しかし、そういった自死遺族の悲嘆に関する研究が乏しいことから、発表者の川島先生は、現在、その実態調査に取り組みされている。その調査の一部から、自死遺族の悲嘆プロセスにおいて宗教がどのように位置づけられているのかという発表内容であった。

人は死別に直面した際、その人自身のやり方で、その喪失体験を意味づけようとする。なぜなら、死別は自己の物語に混乱や機能不全といった意味の危機をもたらし、死別体験者は、物語の途中で中心人物を失った小説のように、それ以降の章は物語の辻褃が合うように書き直しを余

儀なくされてしまうからである。その喪失体験の意味づけの中心に位置するのが、「意味の再構成」というプロセスであり、意味了解、有益性発見、アイデンティティの変化といった3つの主要な活動を伴う。そして、そのプロセスにおいて宗教や倫理の物語などの「聖なる物語」が多く語られ、とくに死別後の意味再構成と宗教的物語との関連について多数の研究報告がある。例えば、BraunとBerg(1994)は子どもを亡くした母親にインタビューを行い、子どもの死を従来の精神的な拠り所である信仰や信条に位置づけられない母親は喪失適応が難しく、死を宇宙の法則として神聖なものと理解した場合うまく適応したと報告している。ただし、語りとは文化に流布しているものをそのまま語るのではなく、それを引用しながら私バージョンに語りなおす作業である。

本発表では、一人の自死遺族の語りを取りあげ、そこで語られるグリーフプロセスについて報告した。まず、語りは「なぜ死んだのか」という原因の探求に始まり、その後、宗教的物語との出会いにより個人との関係性が再構成されることで、1つの意味再構成の形にたどり着くことができた。その結果、その死を包摂する語りにゆだねることで、より大きないのちの循環サイクルの中に位置づけられていくことが明らかとなった。このプロセスでとくに注目すべき点は、「なぜ死んだのか」という故人の人生に対する意味、そして「遺された私はどうやって生きていけばよいのか」という自死遺族の人生に対する意味を探し求める能動的な探求の果てに、宗教的な物語に出会い、その物語にゆだねていくことで意味が再生されていく点であり、この受動的に「ゆだねた」瞬間をどう記述していくかが今後の課題である。

### 4.『心理学から見た「生者」と「死者」の繋がり-故人との絆の継続に焦点を当てて-』:中里和弘先生(大阪大学大学院,日本学術振興会)

発表者の中里先生は、報告者である私と同じ大学院の講座に所属する先輩である。そのため、ゼミなどでいつも興味深く研究発表を聞かせて頂いている。日本では、死者儀礼、供養において仏教を背景としており、故人との絆を継続する

ことに関して洗練された文化形態を持つことが指摘されている。そういった文化の中で培われてきた感覚を心理学的にどう捉えていくのかという発表内容であった。

-----

死別が他者との永続的な物理的分離を前提としながらも、遺族の中で心理的存在として生き続けていると考えられる。これが本発表における、故人との絆の継続(Continuing Bonds:以下CB)の基本的考えとなる。CBは、遺族における内的な故人との関係性の継続を反映した具体的な表象と定義され、「心理的存在としての故人の認識」、「故人との心理的会話」といった現象が挙げられる。本発表では、発表者が過去に行ってきたCBに関する一連の調査結果(研究1～4)について述べていく。

まず、このCBを測定する尺度としては、Fieldらが中心となり尺度を作成しているが、なかでも2003年に作成されたCBS尺度はCBを測定する尺度として評価・使用されている。そこで、発表者がホスピスで家族を看取った遺族を対象にこの尺度の日本語版の作成を行い、十分な信頼性・妥当性を確認している(研究1)。

次に、このCBの関連要因としては、基本属性として性別、故人との続柄はCBとは関連せず、故人と親密であった人、死別して間もない人、死に対して心の準備ができていなかった人ほど故人との絆を強く感じているという結果が得られている(研究1)。また、死別からの経過時間について、2年以上過ぎた場合、CB得点に有意な差は見られず、死別から年数が経過しても、遺族は依然として故人との絆を感じ続けると考えられる(研究2)。そして、CB得点の高い人、つまり、故人との絆を強く感じている人ほど、「生者」と「死者」との繋がりの長期的な継続、死後の世界の存在を信じる傾向にあるといった特徴が認められた(研究2)。

続いて、CBの適応性、非適応性についてである。臨床現場では、「逆備給」や「心理的離脱」といった概念が重要視され、故人との関係性を保つことは病的とされ、絆を断ち切る必要があるとする思想に転化されてきた。そこで、CBが不

適応な状態の指標になりうるのかについて検討した結果、CBが悲嘆を媒介して精神的健康に否定的な影響を与える可能性は否定できないが、CBのみをもってそういった指標にはならないことが示された(研究3)。

最後に、CBは遺族に肯定的感情を生起させることや、否定的出来事から得られる肯定的変化であるPost Traumatic Growthと関連することが指摘されている。そこで、CBの肯定的影響について検討した結果、CBは、安心感や前向きな志向など、日常生活で生じる問題や死別に伴う喪失に対するコーピングとして機能、つまり、ポジティブな感情や認知的変化をもたらすことが明らかとなった(研究4)。ただし、喪失感や精神的圧迫感など、個人の適応過程によっては、ネガティブな感情を生起させる可能性も示唆された。

以上、発表者がこれまでに行ってきた調査研究から、CBをもって不適応な指標とはいえず、遺族への肯定的な影響があることが示された。ただし、故人との生前の関係性、死別の状況、遺族の心理状態によっては、否定的に作用する可能性は十分あると考えられる。そのため、CBの両価性を認めた上で、これまで報告の少ない具体的な臨床ケースの知見と理論の統合を行っていき、臨床場面への応用も含めて、さらなる実証的、縦断的研究の蓄積が必要と考えられる。

#### [ 指定討論 ]

指定討論者: 田畑邦治先生(白百合女子大学文学部)

#### 《 辻本に対するコメント 》

表現の獲得ということから、ギリシャの歴史家ヘロドトスが述べた、ある王によって計画された実験のことを思い出した。その王は、子どもの言語獲得に興味があって、幼い子どもを人里離れた屋敷に閉じこめ、家来に子どもに喋りかけないようにと命じた。結果として、その子どもたちは成長しても喋ることができなかったと言われている。つまり、我々は自分が正しいと思うことを子どもに伝え、語り、呼びかけており、その語りかけを

通して子どもは言葉を覚えていくのである。よく幼い子どもに宗教を押しつけてはいけないといわれるが、例えば「天国」という言葉についても、そういった語りかけによって、子どもはその表現を獲得し、その結果、死後の世界を考えはじめていくのではないだろうか。

次に、心理学に対する問題提起として、発達理論を形式的に当てはめることについてどう考えるべきなのだろうか。松尾芭蕉は「俳諧は三尺の童にさせよ」と述べ、最も大事なことは、子供のよ様な心の人間に分かっているのだと言っている。発表の中に、生と死が弁別されていないものを「未分化」としていたが、年齢に応じた認識に独特の価値があるとも考えられる。

### 《 大村先生に対するコメント 》

キーワードとして受け取ったのは魂の問題である。発表では、特定の宗教を信じていない人が魂の存在を信じているとあり、これを原始的な宗教心と呼んでよいのかどうか分からないが、注目すべき点である。哲学においても、例えばフランスの哲学者ベルクソンは、『物質と記憶』という著書において、魂と体との関係を論じている。魂についての人々の語りは一見したところ非科学的であるともいえるが、そういったことを語り出す人たちの生々しい経験、その人たちがもっている具体的な経験の語りに注目すれば、科学的な見地からは測りきれない価値があるのではないだろうか。

こちらからの質問、議論の可能性として、この発表において伝統的な宗教の位置づけがどのようにされているのであろうか。教義、組織としての宗教団体を信じない人は増えてきているが、墓参りといったものは依然として宗教団体との関係を持ち続けており、そういったことを掘り下げていけば面白いのではないか。

### 《 川島先生に対するコメント 》

哲学の分野においては、現代哲学、とくに 20 世紀に生まれた現象学では、この意味の問題が中心である。それまでの哲学が客観的な対象、客観性を重視していたのに対し、現象学では私

たちが経験する意味を記述することが中心的なテーマであった。ところで物語には意味の貯蔵庫のような性格があり、私たちはその物語をいろいろと解釈しているのである。

現代の医療においても「物語に基づいた医療」(Narrative Based Medicine)と「科学的根拠に基づいた医療」(Evidence Based Medicine)が考えられていて、これら 2 つの相互補完的なケアが大切だと言われているが、発表内容にあったケアとの関係にからも注目すべき点である。

### 《 中里先生に対するコメント 》

哲学という観点からみて、興味深かったのは、発表内で繰り返し述べられた「心理的存在」という問題である。この問題はギリシャ時代から扱われており、一般的には物理的存在と心理的(精神的)存在に分けられる。現代の私たちは物理的存在だけが存在だと考えがちであるが、これはわずかに 200 ~ 300 年くらい前からの考え方にすぎず、長い歴史からみると、心理的存在とか魂の存在のほうが強く信じられており、そちらの方にこそ実在性があると考えられてきた。こういった問題を含め、この発表内容と哲学、宗教学との対話が望まれる。

### 《 総括 》

最後に、意味というものを心理学でどのように捉えていくのかということが重要である。それについては、いろいろと検討されているであろうが、今後も哲学、宗教哲学との対話がなされることが望ましいと思われる。私は最近日本人の死生観について研究しており、昨年 6 月この研究会において、源氏物語について発表した。そこで注目したことは、物語の意味論と宗教の意味論は、少なくとも源氏物語においては非常に近いものとして捉えられている点であった。「蛭」巻で、物語とは何であるのかという物語論が展開されていて、そこでは、救いのための宗教的な方便と近いものとして考えられているのである。物語と宗教との関係については、この宗教心理学の分野において探求していくことが望ましいと思っている。

[ 質疑応答 ]

《 田畑先生から大村先生に対して指摘のあった  
伝統宗教の位置づけについて 》

伝統宗教が私たちに影響を与えていることはもちろんであるが、逆に、私は我々の素朴なスピリチュアリティが伝統宗教に大きな影響を与えていると考えている。例えば、禅宗、とくに曹洞宗では、魂は死とともに無くなると道元は述べていることから、死後の世界というものを想定していない。しかし、実際は、僧侶が生活していくために、何回忌といった死者供養をやっている。つまり、私たちの死生観が影響して、それを取り入れなければやっていけないという現実がある。同じように、浄土教が説く極楽世界も、臨死者がみる幻覚、幻視を阿弥陀如来の来迎として浄土教が取り込んでいったとも考えられる。また、キリスト教、とくにカトリックでは、日本の中で自らが根付いていくために、日本人の祖先崇拝をその教義の中に位置づけようと、カトリックの中央協議会が見解をだしている。このように、私たちの形にならないような宗教感覚、スピリチュアリティが既存の教団に与えている影響は大きい。

フロア①

(コメントとして)

指定討論の中で、「親が子どもに宗教を押しつけてはいけないということが言われているがそれは本当であろうか」というコメントがあった。私は子どものスピリチュアリティを研究しており、そのデータによると、何かスピリチュアルな体験をした子どもたちが一神教的な親の体験を抑えつけるといった結果が得られている。そこに宗教の光と闇があるのではないかと考えている。

(川島先生への質問)

自死遺族の語りに含まれる宗教的な物語のきっかけとなった「占いおばちゃん」について、自死遺族とその人物とのその後の関係について教えてもらいたい。ある種の物語を与えられて、それについて能動的な意味づけを行った後、その関係性から離れた時に、能動的に生きていくことが大切だと思う。その人物から与えられなければ自分で物語を創っていけないとなると、悪い意味で

の宗教になってしまうと思う。

(川島先生のリプライ)

現在、どうなっているのかは把握していない。ただし、その方は言われたことをそのまま受け取るのではなく、自分で取捨選択をしているようだ。しかし、提供された物語の影響は大きいと、悪く変わっていく可能性もあり、難しい問題だと思う。そういったことを含めて、どうやって寄り添って聞いていくのかという方法論の問題にもつながると思う。

(松島先生のリプライ)

一神教の部分についてであるが、それは教義の問題だと思う。教団には教義が存在し、その教義から逸脱すると、それは教団から見ると異端となってしまう。それを光もしくは闇と呼ぶのであろう。しかし、単に教義だけでなく、組織、個人の信仰といったいくつかのベクトルから考える必要があり、一概に光と闇といった二元論ではなく、もっと精査していかなければならないと思う。

フロア②

(コメントとして)

高齢者研究では、老年的超越というテーマがブームになっている。85歳、100歳といった超高齢者になってくると、人生観や認知行動などが大きく変化してきて、宗教的な感覚が強くなると指摘されている。日本人は認識レベルでは宗教を信じていないが、感覚レベルでは宗教心というものがある。私はアニミズムの研究を始めたばかりであるが、その感覚的な宗教心が、信仰という明確な形で形成されていく過程に興味がある。アニミズムは子どもだけのものではなく、当然大人にも継続して残っているものである。そういったものが意識のうえで明確になっていく過程、それが宗教の形成過程だと考えている。そういった視点から、宗教心理は人間存在の根源を扱っているような気がした。

フロア③

(川島先生への質問)

苦しむ(being pain)というのは人間の心理的側面であるが、having pain(苦しみを抱えて

生きる)は与えられるものなのだろうか。例えば、passion を情熱と訳すのか、受難と訳すのかという問題は「意味」であるが、宗教が与えた時に受難と訳す。そこに宗教の意義があるのであるが、心理学にどう持ち込むのが問題であり、そういった難しさを踏まえて、ナラティブなアプローチをせざるを得ないのであろう。今回の発表にあった「能動と受動の間」という部分を、どうエビデンス化するのか、もしくはデータ化するのかという問題についても、プロセスの記述が最も適していると思われるが、どのように考えているのか。

**(川島先生のリプライ)**

大変難しい問題であるが、今の指摘を受けて、次のようなことを思い出した。Neimeyer 先生のワークショップに参加した時に、あるご遺族が撮った雲の写真を見せられた。他の参加者たちは「あっ！」と言っていたが、自分には意味が分からなかったので、その写真をよくよく見てみる

とそれは天使の形をしていた。つまり、この「あ！」という瞬間こそが意味再構成の瞬間であり、そういった瞬間に宗教的な物語が入っていくのだと考えている。しかし、こういったことを具体的にどう研究し、位置づけていくのが実際に悩んでいるが、その方法の一つとして、ご遺族のグリーフプロセスに寄り添っていくしかないと思っている。

**[最後に]**

当日の夕方から懇親会(@梅田)が開かれたが、大勢の方に出席していただき、楽しい時間を過ごすことができた。以上、簡略ではあるが第8回研究発表会の報告とさせていただきます。最後に、このワークショップを企画・開催するにあたり、お忙しい中、ご尽力いただいた東京大学の松島先生にお礼申し上げたい。

**死別後の意味再構成と宗教的物語—ワークショップ「死生の意味するもの：生と死をみつめる宗教心理学」をめぐる雑感**

川島大輔(国立精神・神経医療研究センター)

日本心理学会ワークショップ「死生の意味するもの：生と死をみつめる宗教心理学」において話題提供の機会をいただき、「自死遺族の意味再構成と宗教的物語」と題する発表を行った。このたびワークショップの感想についての執筆依頼を頂戴したので、この場をお借りして、当日の発表概要と現在考えていることについて述べさせていただきます。

当日は、自死によってご子息を亡くされた A さんの語りについて事例分析を行った。そしてグリーフ・プロセス、とくに遺された方がどのように意味を探し求め、宗教や倫理の物語といった「聖なる物語」に出会い、そこでいかに意味を再構成していくのか、というプロセスに迫ろうとした。結果、死別直後に見られた「なぜ亡くなったのか？」という原因を探し求める活動(意味理解)の果てに、ある占い師の語る宗教的な物語(「亡くなった

息子は親のような慈愛であなたを見守っている」という物語)に出会い、そこに意味をゆだねることで、自己と他者(故人)との関係性を再構築しようとしている様が描かれた。

本発表で理論的な拠り所とした意味再構成理論(Gillies & Neimeyer, 2006; 川島, 2008)では、死別後に遺されたものは能動的に意味を再構成しようとするをその理論の中核に据えている。しかしこれまでの研究から、私は「能動的」な活動の限界について考えるようになっていたため、能動的に意味を探し求めるという行為と、社会文化に流布する物語を受け入れるという行為の間(発表では受動と能動のあいだという表現を用いたが)をどのように掬い、記述していくのかについて関心を持っていた。

死別後の意味再構成プロセスにおいて、時間の経過とともに事実の描写や感情表現から実存

的でスピリチュアルな内容に、また否定的な内容からより肯定的な内容に移行していくことが示唆されているが(川島, 2008), 本発表の事例においても同様のプロセスがうかがえた。つまり、亡くなった直後はその原因や犯人探しが A さんの生きることを支えていたが、メタ的な宗教的な物語と出会うことで「原因探求の物語」から緩やかに離れ、喪失や自分自身の人生に対する新しい意味を見出していった様が語られていたのである。この事例において見られたように、意味再構成プロセスにおいて、遺されたものは一度大きな物語に意味をゆだねる必要があるのではないかと、さらに意味をゆだねる瞬間とは、たとえば仏教的な用語であれば、自然(じねん)という言葉で言い表されるものではないだろうか。これは自我から解放された境地、つまり無我あるいは大我と言われるものであり、自己の執着から離れ、他者や周囲の環境、そして大きな循環サイクルと一体となっている状態である。つまり、物語に出会い、ゆだねる瞬間に、遺されたものは意味を自(おの)ずから然からしむ状態にあると言えないだろうか。それはまさに受動と能動のあいだであり、認知的に了解する以前の直観、感覚の領域である。

また、能動と受動のあいだ、あるいは意味をゆだねる瞬間をどのように記述していくのかについて、私は身体性が重要になってくるのではないかと考えている。別の学会において私は、自死遺族の手記やインタビューの分析を行い、新しい意味がむすばれる際には、自己の身体性と季節や自然が関連づけて語られる可能性を指摘した(川島, 2010)。言い換えれば、より大きな循環サイクル(たとえば天気や自然現象)に対する自らの身体性を伴った言及が、前述の意味をゆだねた瞬間、あるいは自然の一つのメタファーとして考えられないかということである。

ところで、現代社会においては、ただ受動的に

大きな物語を受け入れることは容易いことではないのかもしれない。たとえば A さんは「なにを柱に自分が生きていった方がいいかって言うのは、やはり自分で見つけるのがいい」と語っているように、自分で意味を見出すことの意義を語っている。はじめから大きな物語を受け入れることは難しいが、自(みずか)ら意味を探索した果てに、聖なる物語に出会い、意味を「ゆだねる」というプロセスが必要なかもしれない。

これまでの議論は、具体的な根拠が乏しく、またそのロジックも未整備な部分が多い。しかし自死の語り、過去の特定の出来事や亡くなった原因の物語に拘泥し、悲嘆が複雑化してしまう危険性も指摘されていることを鑑みれば、遺された方の意味再構成プロセス、とくに意味をゆだねることの詳細について、さらに検討していくことが重要であると考えている。最後に、今回、ワークショップでの発表ならびにニューズレターでの感想執筆の機会をいただいた松島公望先生に、この場をお借りしてお礼申し上げたい。

#### 引用文献

- Gillies, J., & Neimeyer, R. A. (2006). Loss, grief, and the search for significance: Toward a model of meaning reconstruction in bereavement. *Journal of Constructivist Psychology*, 19, 31-65.
- 川島大輔 (2008). 意味再構成理論の現状と課題——死別による悲嘆における意味の探求—— 心理学評論, 51, 485-499.
- 川島大輔 (2010). 明るい天空や天気の語りに、遺されたものはどんな意味を見出しているのか——自死遺族の語りに着目して—— 日本質的心理学会第7回大会シンポジウム「質的研究をいかに継承するか? 生と死に関するナラティブへのトライアングレーション」

## 「終末期患者の有する宗教性と死の受容」 —「臨床宗教心理学」の可能性と拡がり—

大村哲夫(東北大学大学院)

2010年日本心理学会第74回大会において、「終末期患者の有する宗教性と死の受容」について話題提供を行った。筆者は臨床心理士として、在宅ホスピスの現場で終末期の患者やその家族、医療・介護スタッフのこころのケアにも当たっているが、そうした生と死の場面で気づき学んだ知見を紹介した。

読売新聞の2008年宗教意識調査では、宗教を信じている人が26.1%、信じていない人が71.9%にのぼる。また東北在宅ホスピスケア研究会が、在宅で死亡した患者682人の遺族に行った悉皆調査(2008)でも、患者の宗教なしが、54.6%、不明が24.3%と宗教的ではない現代日本人の傾向がうかがわれる。その反面、死んだ人の魂が生まれ変わるとする人が29.8%、別の世界へ行く23.8%、墓にいる9.9%など死後も魂が存在すると信じる人が多くあり、魂が消滅する17.6%、存在しない9.0%とする人を大きく引き離している(読売新聞2008)。実際の行動をみても盆や正月に墓参をする人78.3%、初詣へ行く人73.1%、しばしば家の仏壇や神棚に手を合わせる人が56.7%(読売新聞2008)となっている。東北の在宅死亡者の宗教行動でもほぼ同様の結果で、墓参り74.9%、初詣33.3%、日常のお祈りやお勤めなどが41.5%となっている(東北在宅ホスピスケア研究会2008)。このように宗教の教義や団体から一定の距離を置き自らを「無宗教」とする現代日本人の宗教性が、終末期における自他の死の受容にどのような影響を与えているのだろうか。

終末期患者は、幻覚や幻視などを体験する「せん妄」という症状を呈することが知られている。せん妄症状は70-80%の患者が経験するとされるが、「他者には見えない風景や人物について語った」患者は先の東北在宅ホスピスケア研究会の調査によると42.3%、見えたものは「すでに亡くなった家族や知り合い」が52.9%となってい

る。終末期ではない我々が「他者には見えない死者」を見れば、怖れたり精神の疾患を疑ったりするだろう。しかし前述の調査によれば、多くの患者はそれほど動揺していなかったこともわかる。おそらく魂の不滅の信念や、墓参・祈りなど日常習俗における死者との関わりが、終末期において親しみのある「死者ヴィジョン」となり、生と死の移行における死の受容を助けていることによる。親しい死者の出現は、死後世界の存在・魂の不滅を示唆し、現世と来世の自由な交通の保障、生者の守護など現世への関与を可能とする希望をもたらし、「死ぬ意味」をも与えることになる。キューブラー=ロスが言う「死の受容」は、現実には信仰を持つ人であっても困難である。しかし「死者のヴィジョン」の出現は、困難な「死の受容」を棚上げし、死を受け入れることを容易にすると考えられる。患者を看取った家族らもこうした死者ヴィジョンの現象から、「患者は親しい死者に迎えられて旅立った」という(お迎え)ストーリーによる意味づけを行うなどグリーフ・ワークにも影響を与えている。

筆者はこうした臨床現場での宗教的・心理的な問題点を拾い上げ、その場における心理機序などを研究している。こうした研究はいわゆる「宗教学的宗教心理学」と「心理学的宗教心理学」の枠組みを越える新しいアプローチとなると考えている。それは臨床現場へのフィードバックによって、現場で再吟味され鍛え直されるなど研究と現場の両者にとって有意義な関係を構築する。筆者らは「タナトロジー研究会」という在宅ホスピスの医療者や介護者と社会学・哲学・宗教学などの研究者、そして宗教者たちと共に学び合う場を継続している(『どう生きどう死ぬか—現場から考える死生学』弓箭書院2009)。研究会では昨年12月、本大会で共に話題提供した川島大輔氏を仙台に招いて「自死遺族の現状と課題」について発表してもらった。自死遺族と家族を喪失した遺

族の間には自責感という共通する感情があり、大いに参加者を刺激することができた。こうした臨床と結びつく研究が宗教心理学の可能性を拓

げていくと期待している。宗教心理学研究会の存在は、ますます重要なものとなっていっだろう。

## 「生」と「死」の連続性から見る人間存在の意味と宗教について

中里和弘(大阪大学大学院)

何気ない日常生活を送る上で、我々は「生とは何か、死とは何か」を常に考えているわけではなく、逆にそれは、人間が生きていく上で適応的とも考えられる。自分がいつ死ぬのか分からない。だからといって、そればかり考えたしたら、常に死の恐怖に苛まれ、生き続けることになる。しかし、我々にとって、大病、希死、死別、墓参りなどの宗教的儀式は、我々にとって「生と死」を考える刺激となる。そして、「生と死がある処には宗教」があり、「宗教ある処には生と死」がある。ワークショップでは、質的・量的研究から「生と死」、「宗教」を心理学的に検討するといった意味で大変興味深いものであった。

私は、死別経験者の自助グループに関わっている。そして死別経験者が話すテーマの1つに「あの世」がある。当然、あの世の存在を否定する者もいるが、「あの世」がどういった処であるかに関する考え方の違いはあれ、あの世の存在を信じる者は多い。そして、その考えがいつから形成されているのか、何が形成過程に影響を及ぼすのかについて明確な答えを出すことは難しい。辻本先生の話提供にある死後の世界観は、幼児期の認知的発達の問題と関連するが、5~6歳の時には子ども自身がなんらかの死後の世界観を持っており、また、指定討論者の田畑先生やフロアーの意見にもあったように、幼児、青年、成人と成長するにつれ、死後の世界観の内容が個人内で変化・細分化し、死後観の形成には、大人やメディアなど社会的環境が大きく影響する。辻本先生は家庭や教育現場での「デスエデケーション」も研究されているが、今回の発表は、デスエデケーションの「内容と意味」に関連するテーマであり、「死」を生物学的観点のみで捉えない心理

学では、辻本先生の幼児期から影響要因を含めた死生観の発達を解明することは、デスエデケーションの在り方を考える重要な基礎研究になると感じました。

そして医療現場で終末期患者、家族(遺族)と接する大村先生の発表内容とその言葉は「臨床の知」を感じさせるものでした。『終末期では「生きるための価値観／生きる意味」だけでなく、「よく死ぬ」ために「死ぬ意味」を伝えてきた宗教が必要になる』という事実は非常に考え深い言葉でした。一般的には、「生きることの意味、死ぬことへの答え」と捉える事が多いように思いますが、誰も経験したことのない死に臨む者、あるいはその人を看取る家族にとって、「死の意味」は、「生き抜くこと」、「死にざま」を構成する重要な要素なのかもしれません。そして、田畑先生の指摘にもあったように、「日本人は宗教を信じていない人が多いが、魂の存在は信じる」現象に関して、大村先生のお話を聞く中で、日本人には特定の宗教を信仰してなくても、独自の「宗教性／死生観」を持っていること、それは当然、それまでの人生の中で関わってきた宗教や宗教的行事から意識的、無意識的に影響を受けており、「生と死」の門間にある終末期では、その「宗教性／死生観」が意識化・前意識化し、死の受容にも深く関わることを学ぶことができました。

社会情勢の変化に伴い自死者が増え、自死は社会問題となっているが、それは同時に同じ数以上の遺族が存在することも意味する。そして、特に自死遺族の場合、社会的スティグマの問題、そして川島先生の発表にあったように、「なぜ死んだのか／なぜ死ななければいけなかったのか」といった故人の人生に対する意味の探求は、時に

遺族の悲嘆のプロセスを複雑化させる。川島先生が発表して下さった自死遺族の意味の再構成のプロセスは、遺族のナラティブが途切れることのない過去・現在・未来といった時間軸で再体制化されることを示す興味深い内容でした。フロアーの方と川島先生とのお話にもあったように、探求を「能動的」と受動的に「ゆだねる瞬間」といった観点、そして、そこに宗教的な出会いがある場合もあり、ただし、それは絶対的なものでなく、『引用しながら私バージョンで語り直す作業』、これは大村先生が報告された「死の意味」に関する個人の「宗教性」を尊重する姿勢と通じるものがあるのではないかと感じました。自殺予防の社会啓発に関しては、運動が推進される重要性を前提とした上で、自死の現状と予防について適切な社会啓発がなされていないと、遺族は自殺予防を『予防できなかった』遺族といったように、さらに二重のスティグマを生じさせ、遺族を追いこんでしまう危険性を危惧する声も聞かれます。そういう意味でも、遺族ケアは自殺予防と並行して進めなければならない問題であり、川島先生の発表は今後の自死遺族ケア、遺族の心理を理解する上で貴重な発表であったように思いました。

また、私が発表した遺族と故人との絆の継続に関しても、他の3人の先生方の発表と深く関係するものであり、大変勉強になりました。辻本先生の発表をお聞きして、「大切な人が死んでも、心の中で生き続けている」といった感覚は、どの程度、重要他者との死別経験に影響を受け、死別経験以外の大人やメディア、教育、宗教に影響

を受けて形成されるものなのか興味を抱きました。大村先生の終末期患者・家族の死の宗教性に関しては、海外でも、終末期患者・家族が、死別後も両者の絆が継続することを共有することの重要性が指摘されており、改めて終末期の患者・家族ケアにおける連続性を考える必要性を感じました。また、川島先生が発表された遺族が意味の再構成を行いナラティブを語り直す作業の内容の1つとして、遺族が故人との絆をどう考えるのかといったテーマは深く関係するように思いました。

今回は田畑先生より、個々の話題に対して心理学とは異なる哲学・宗教学の視点からご指摘を頂き、充実したワークショップになったように思います。田畑先生は今回の「生と死」に関連する話題に関して、ギリシャ哲学やフランス哲学者のベルクソン、あるいは源氏物語や松尾芭蕉の思想等を紹介し論じて下さったことで、「生と死」の問題が人間存在の根本をなすと共に、学問の根底にあることを意識しました。そして、シンポジウムには心理学、宗教学、哲学を専攻される先生方が参加され、フロアーの先生方のご意見によって、話題をより深い処まで掘り下げて議論できたように感じました。田畑先生が「心理学」と「哲学・宗教学」との対話が望まれると言われていたことが、今回のワークショップは、この研究会の名が「宗教心理学」であるように、『心理学』と『宗教学』の両者の学問から現象を捉えてこそ、『人間の真理』を探究することができることを考える有意義なものでした。

## 第8回ワークショップ企画に参加して

具志堅伸隆(東亜大学)

日本心理学会第74回大会のワークショップ「宗教心理学的研究の展開(8)ー死生の意味するもの：生と死を見つめる宗教心理学ー」(2010年9月21日大阪大学)にフロア出席者として参加いたしました。これまでも複数回、参加させて頂く機会がありましたが、今回は宗教心

理学研究会に入会後、初めての参加ということもあり、とりわけ意義深い機会となりました。話題提供者の辻本先生、大村先生、川島先生、中里先生、そして指定討論者の田畑先生のお話、司会の松島先生、その他フロア参加者の方々のコメント・討論、大変興味深く聴かせて頂きました。

私は社会心理学、その中でも特に「社会的認知」の分野を専門としています。社会的認知の研究は、人間を情報処理体とみなしながら、意志や感情の働きを含めた総合的な人間モデルを構築しようとしています。取り扱われる問題は対人認知、態度、感情、自己認知など様々ですが、宗教的な概念が登場することは非常に稀です。近年になって、Greenbergら(1992)の「恐怖管理理論(terror-management theory)」が死の恐怖を取り上げて注目を浴びていますが、そこにおいても「死」は、自尊感情を脅かす変数の一つとして扱われており、死と分かちがたく結びついているはずの宗教的概念に着目した議論はほとんど行われていないようです。信仰という非常に人間らしい普遍的な営みを研究の遡上に載せれば、社会的認知が描く人間モデルはより豊かなものとなるだろうと、常々考えていました。とは言うものの、私自身どこから手を付ければよいのかわからず、最近になってやっと、おずおずと研究に着手したところ です。

自分の話が長くなってしまいましたが、そんな私にとって、宗教心理学研究会のワークショップは関心を共有する方々と出会えるとても貴重な場です。今回も先生方のお話をお聞きして、宗教と社会的認知との繋がりを再認識することができました。それは幾つもの点で言えることなのですが、以下では、「心理的な免疫機能」と「態度の二重性」という二つの点に絞って、整理してみたいと思います。

心理的な免疫機能について:人間に備わった心理的な免疫機能の働きは、心理学の各分野で研究されていますが、社会的認知の分野でも、人が様々な角度から自己の認知や感情を調整して、不安を軽減し、自尊心の安定をはかっていることが明らかとされています(e.g., Taylor & Brown, 1988; Tesser, 1984)。それによると、私たちはありのままの現実を直視するというより、常に情報を取捨選択し、自己にとって好ましい解釈を作り上げて生きているのです。それは時に、適応的なイリュージョンと表現されたりするほどです(Taylor & Brown, 1988)。宗教的な認知や信念も、そのような心の機能と関連づけて捉

えることができると思います。今回のワークショップでは、人間が自己あるいは近親者の死という深刻な脅威に直面したとき、宗教的な意味を含んだ再解釈やイマジネーションを働かせて不安や恐怖、悲しみを和らげ、受容可能な形に変化させてゆくプロセスについてお話を伺うことができました。その中で紹介された魂の永続性という素朴な信念(大村先生)、意味の再構成とスピリチュアルな物語(川島先生)、死者との心理的な繋がりが(中里先生)、は深刻な危機的状况においても心の免疫システムが有効に機能することを示しているように思います。また、辻本先生のご発表では、子どもが自由な想像力を働かせ、「いま・ここ」の世界を越えて「目に見えない世界」を頭の中で描くようになる過程を見ることができました。この豊かなイマジネーションの力こそが、心理的免疫機能の基礎となるでしょう。

態度の二重性について:大村先生がお話の中で「日本人は宗教を『信じていない』と言いながら、受け入れている」と述べておられたと記憶していますが、信仰に対する日本人の複雑な態度構造を言い表す表現として、大変納得できました。無宗教を自認して、宗教的な要素を表向きは否定しながらも、内心ではその力を求めている。このような一見矛盾した態度表明は、社会的認知の分野で近年盛んに議論されている、態度の二重性につながるころがあるように思います。その議論によると、私たちの態度は、普段意識される顕在的な要素だけでなく、あまり内省されることのない潜在的要素を併せ持っており、両者はしばしば相反する内容となっています(Greenwald & Banaji, 1995)。トリガーとなる出来事に遭遇すると、顕在的態度と乖離した潜在的態度が優勢となり、人の思考や行動を左右するのです。つまり、人の態度や行動において、矛盾はつきものであり、私たちは複雑な態度構造のうえでバランスをとりながら、現実世界に対処しているということになります。現在、このような潜在的態度の問題は、ステレオタイプの偏見や差別的態度の観点から研究されていますが、今後は、宗教的態度の潜在性についても考えてゆく必要があると改めて感じました。

以上、私の専門分野に関連づけた話ばかりとなつて大変恐縮ですが、ワークショップの感想とさせていただきます。入会して間もない新参加者ですが、今後とも皆さまと交流し、多くのことを教えて頂くことを心待ちにしております。どうかよろしくお願ひいたします。

#### 引用文献

Greenberg, J., Solomon, S., Pyszczynski, T., Rosenblatt, A., Burling, J., Lyon, D., Simon, L., & Pinel, E. (1992). Why Do People Need Self-esteem? : Converging evidence that self-esteem serves an anxiety-buffering function. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 913-922.

Greenwald, A. G., & Banaji, M. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, **102**, 4-27.

Taylor, S. E., & Brown, J. D. (1988). Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 193-210.

Tesser, A. (1984). Self-evaluation maintenance process: Implications for relationships and for development. In J. C. Masters & K. Yarkin-Levin (Eds.), *Boundary areas in social and developmental psychology*. Academic Press. pp. 271-299.

## 第 8 回研究発表会を拝聴して

松田茶茶(神戸学院大学人文学部)

昨夏、記録的猛暑の中、コンクリートと緑の量の調和のとれた大阪大学豊中キャンパスにて、第 8 回研究発表会を拝聴させていただきました。今回の発表会は筆者にとって、色々な点で新たな意味をもつものでした。

一昨年度までは、本研究会の研究発表会に企画者あるいは発表者として関与することが多く、そして昨年度は博士論文の提出と出産が重なるという怒濤のような生活の中での発表会参加となつてしまいました。そのようなわけで、今回は自分の役目を気にすることなく、かつ 120 分間ずっと集中し、発表内容に浸かりこめる立場を満喫いたしました。また、学生ではなくなつて初めての研究発表会でもあり、その点でも幾分、気持ちが落ち着いた状態で先生方のお話をお聴きすることができました。(やはり身辺が落ち着かない状態というのは、何を話すにつけ、聞くにつけ、集中力を欠くものだと思ひました。)

また筆者にとってさらに有り難かつたのは、“生と死を見つめる宗教心理学”という共通キー

ワードにて今回の研究発表会が構成されていたことです。ここ数年、死生に関する発表が各種の心理学会で増えてきたような印象は受けていたが、“宗教”をもキーワードとして並べて扱う発表はやはりなかなか見当たりません。そのため筆者自身の研究興味としては、本研究会のおこなう研究発表会が何より貴重な情報収集/交流場となっています。

各先生のご発表はいずれもとても興味深いものでした。どの配布資料もラインマーカーで埋めつくされてしまい、後から見直すと、どこに的を絞ればよいのか分からなくなつてしまつたほどですが、各先生のご発表の中で最も印象に残つたことをここに再生し、記憶を強化しようと思ひます。

まず辻本先生のご発表は、子どもにおける人間と動物の死後観の発達についてでしたが、“死んだらどうなるか”という質問に対する子どもの反応をカテゴライズするという調査以前の、序論の一部に大きく興味を引かれました。それは、“子どもは‘死んだらどうなるのか’”という問いに

対する適切な答え(表現)を知っている”，“死者の行方を表現するための名称が日常生活に溢れている”という箇所です。これは、子どもの反応結果を解釈するには非常に厄介ですが、しかし面白いパラドックスを呈する問題だと思います。辻本先生のおっしゃるように“表現の獲得＝宗教性の萌芽”と捉えるか、あるいは“学習された適切な答え方を機械的におこなっているだけ”と捉えるか、子どもによって個別判断をしなければならぬかもしれません。しかし後者の場合、学習内容の機械的繰り返し、その学習内容に対する信憑の強化にやがてつながり、その概念が自己に内在化していくとも考えられ、それはまさに“無条件に信じること”の学習”であり、宗教的なものであるように感じられます。

大村先生のご発表の中では、“生きるための価値観では、‘よく死ぬ’ことはできない”という部分にインパクトを受けました。考えてみればごく当然のことのようですが、このことを了解している人はそれほど多くはないと思います。なぜなら、“高いQOL”と“悔いのない死”が結びつけられることのほうが多いように見受けられるからです。もちろんQOLは高いことが望ましいものですが、“死”の心理と“QOL”について考える際には、この点に気をつけねばならない、ということに気づかされました。

川島先生のご研究はこれまでも色々な場所でお聴きする機会がありましたが、今回は、今ま

でとは異なるご研究を拝見することができ、良い機会に恵まれました。強く思い出されるのは、自死遺族のグリーフプロセスに見られる意味再構成の、“意味を探し求める”段階と“探求の果てに(宗教的)物語に出会い、ゆだねる”段階とを総じて“能動と受動のあいだ”と表現されていたことです。まさに“心理的な転換点”というニュアンスが感じられ、言い得て妙という感じも、また、悲嘆からの回復について、能動的な心理作業が多いものだというイメージを筆者自身は抱いていたため、目から鱗という感じもしました。

中里先生のご発表は今回初めて聴かせていただきましたが、非常に興味深い内容で、かつご発表がとても分かりやすく、まるで自分がこの研究を少しはしてきたかのように一瞬錯誤してしまいました。内容については、“Continuing Bonds”の精神的健康に対する両価性を考える上で、その両価性を生じさせる影響要因として、死別に関する“意味了解”や故人との“愛着”を挙げておられました。これはとても気になる仮説ですので、今後のその研究結果をぜひ聴かせていただきたいと思います。

このように、全てのご発表が大変面白く、素晴らしい、とても刺激的で、筆者にとって大切な情報収集/交流場が、さらにさらに有意義なものとなりました。

ご登壇の先生方、大変貴重なご発表をまことに有り難うございました。

## 事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第 14 号が発行されました。今回の内容は、第 8 回研究発表会報告および発表者、参加者からの感想からなっております。今号も中身の濃い読み応えのある内容となっております。これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。(K.M)

### [宗教心理学研究会の今後の予定]

#### 2011年5月下旬

宗教心理学研究会主催 公開講演会開催予定

#### 2011年7月

宗教心理学研究会ニューズレター第 15 号の原稿依頼

#### 2011年9月

宗教心理学研究会ニューズレター第 15 号の構成・編集作業

#### 2011年9月15日(木)～17日(土)

(1)日本心理学会第 75 回大会ワークショップ(第 9 回研究発表会)開催予定

[開催校: 日本大学文理学部]

(2)宗教心理学研究会ニューズレター第 15 号発行予定

発行: 宗教心理学研究会

編集: 宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当: 松島公望 [psychology-religion@office.so-net.ne.jp]

研究会ホームページおよびメーリングリスト管理・運営

担当: 西脇 良 [rnishiwk@nanzan-u.ac.jp]

研究会ホームページ

[http://www.geocities.jp/psychology\\_of\\_religion\\_japan/](http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/)